

スポーツ  
×  
障がい

医療ソーシャルワーカーに一番大切なのは、  
患者さんの思いをしっかりと受け止めることです。



近藤 尚也 先生

■看護福祉学部 臨床福祉学科 講師

2014年に本学助教、2021年より講師として着任。重度障がい児・障がいの身体活動と日常生活および余暇活動の支援を主な研究テーマとして、アダプテッド・スポーツの普及活動に携わっている。

スポーツの語源をたどると、もともとは「気分転換」などの意味を持つ言葉だったとされています。競い合ったり、より良い記録を出すことをイメージしやすいですが、スポーツが持つ本来の意義はそれだけにはとどまりません。

社会には多様な人がいます。運動が苦手な人や、障がいのある人、高齢者、小さな子ども。そうした身体能力や年齢の条件によって、スポーツを楽しむことができないのはおかしいですよね。

私は今、「アダプテッド・スポーツ」の考え方を通じたスポーツの普及に取り組んでいます。スポーツをするときには、ルールを覚えたり用具をそろえたり、スポーツに合わせて準備をしますが、これはその逆。楽しみたい人に適応(＝アダプト)させて、スポーツのルールや用具を工夫するという考え方です。パラリンピックで採用されている競技もそうですし、寝たきりの人でも楽しめるボール投げ運動なども、その考え方の一つと言えます。

昔から健康維持の方法としてスポーツは用いられてきましたが、高齢者が多くなっている現代では、介護施設や行政の中でも多様な人が参加できる取り組みへのニーズが増えてきています。SDGsや企業のCSR活動にも注目が集まっているので、社会経済活動とのつながりもきっと増えていくでしょう。

スポーツを軸とした取り組みは、もちろん未経験の人でも行うことはできますが、部活やサークルなどでスポーツをしていた人にとっては、それを強みとして、活躍できる分野だと思います。対象者に合ったスポーツを考えると、もともとのルールを知っているからこそ「崩して楽しむ」という方法が取れたり、体の動かし方を伝えるときにも、自身の体験が参考になるからです。あなたのこれまでの経験を生かし、スポーツの視点から誰もが住みやすい地域づくりを、私と一緒に学んでいきましょう。



笠師 久美子 先生

■薬学部 薬学教育推進講座 特任教授

2019年、本学特任教授として着任。医療系学部における、スポーツ医療教育の探索と検証が研究テーマ。日本アンチ・ドーピング機構の公認ドーピングコントロールオフィサー、北海道スポーツ協会のスポーツ科学委員などを歴任するほか、スポーツ国際大会での医務室勤務や海外遠征への帯同など、スポーツの現場で幅広く活動。

スポーツ  
×  
薬学

## 体の中から アスリートを支える

広島で行われたアジア大会をきっかけに、スポーツの現場でアンチ・ドーピング活動に関わるようになりました。アスリートは服用する薬をととても気にします。そして、薬剤師に相談すれば正しい答えをくれると思っています。薬剤師は、その期待に応えていく必要があるのです。薬剤師の主な仕事には、医薬品の整備や情報提供、薬の相談などがありますが、アンチ・ドーピングを広く捉えると、健康管理や栄養管理まで含まれると思います。特に海外では食事情や含有成分の違いから、薬物のような物を摂取してしまう可能性もあるため、薬剤師の介入はアスリートをサポートすることにもなるのです。